

浄土

二月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和十四年四月二十八日 運輸省 (別投承認雑誌) 第三五二号
昭和四十三年一月二十五日 印刷
昭和四十三年二月一日 発行



第三十四卷 ● 第二号

法然上人鑽仰会



「初心茶一生」

葛西宗貫

(裏千家業体)

「初心茶一生」という字も書いてみましたが、生来の悪筆で、何とも仕方がないので、「申」年にちなんで筆を走らせました。

しかし、気持ちでは、「初心茶一生」というところですよ。

— 目 次 —

表紙「寒木」松濤達文画

- ねはん会に因んで涅槃経がめざすもの
.....水谷幸正...(2)
- お歌をいただく(5)
- 仏教とキリシタン信仰(2)
.....岡田章雄...(6)
- 名士訪問 葛西宗貫宗匠.....(10)
- 往 生 抄戸松啓真...(13)
- 輪島聞声尼の父親須藤隆仙...(16)
- 如月に思う(19)
- 四苦八苦⑥ 恨みの七害(怨憎会)
.....渋谷賢応...(20)
- 隆寛律師と聖岡禪師
.....小橋麟瑞...(22)
- ある死の意味するもの(23)
- 布教コンサタント① ハガキによる伝道
.....藤井実応...(24)
- 和訳三部経⑥ 後世に念仏だけを遺す
.....村瀬秀雄...(26)
- 日蓮宗の題目と創価学会の題目
.....岡本 薫...(29)
- 今月のことば(30)

往生はよにやすけれどみな人の

まことのこころなくてこそせぬ

法 然 上 人 御 歌



ねはん会に因んで

「涅槃經がめざすもの」

水谷 幸正

(仏教大学教授)

釈尊がお亡くなりになった日を偲んで「涅槃^{ねはん}会」の法要が各地のお寺でいとなまれております。この釈尊入滅（お亡くなりになったこと）を、入滅あるいは入涅槃と言います。事情については、いろいろな仏伝文学（釈尊の伝記を書いた・物語）に詳しく述べてありますが、そのことを主なテーマにした經典があります。いま、その經典のことについて、少し考えてみることにしましょう。

その經典は涅槃經と名づけられております。ところが、一口に涅槃經といっても、たくさん種類の經典が伝えられております。大きく分けて、現在主として南方アジアで行なわれている小乗系統のものと、北方アジアで行なわれている大乘系統のものとに二分することができます。阿含^{あがん}經の中に含まれている遊行經や、パーリ語經典のマハーパリニバーナ・

スッタなど六・七種類のものが前者に属します。大乘系統に属すものとしては、大般涅槃經（曇無讖^{とんむしん}訳）をはじめとして種々なものまで含まれますと三十種類ほど数えることができます。わたくしたちが涅槃經と呼ぶ場合は、この大乘の涅槃經をさします。

小乗系統のものが、入滅前後の歴史的事情を主にした叙事的記録になっているのに対し、大乘系統のものはその記録に仮托して大乘的な仏教思想を鼓吹しようとしているところに特色があります。言いかえれば、大乘涅槃經は単なる記録文学ではなく、その經典が成立した時代の社会的、教団的背景のもとに、一つの思想的意味を顕わし出すことによって、人々に訴えようとしたものであり、その一手段として小乗涅槃經の記録を利用したにすぎない、と思われまします。

では、大乘涅槃經は何を訴えようとしたのでしょうか。それは「令法久住^{リョウポウキウジュ}」ということなのです。すなわち、法をして久しく住せしめる、ということなのです。令法久住と云うことは、なにも涅槃經に限ったことではなく、すべての經典はこの願いのもとに現われてきたものであります。仏教徒たちの令法久住の願いが、經典とか論書（個人の著作）という形をもつて具体化しているのであります。しかし、その中でもとくに涅槃經は令法久住を強くうち出しているのであります。このことは、そういうことを強調しなければならなかった何らかの背景があったことを反映しているのであります。仏法を阻碍するものがあつたればこそ、久住を叫ばずにはおれなかつたわけです。つまり、仏教の存在をおびやかすものがあつたので、それを克服するために涅槃經が作り出されていったのです。このように、仏教の存在を許さないような状態を意識することを、危機意識あるいは危機思想と呼んでもよいでしょう。大乘涅槃經の出現は仏教における危機意識の自覚およびその克服にあつた、と云うことができます。このことについて、もう少し説明を加えましょう。

釈尊入滅をテーマにした經典であるということが、危機意識をもっとも端的に表現していると言えます。仏陀釈尊を指導者として、仏道を実践し、さとりを得ようとしていた仏弟

子たちにとって、仏の入滅こそ危機中の危機であります。仏という唯一の依りどころを失ったあとに残される依りどころは何であるか、それは仏によって遺された法（ダルマ）であります。「法に帰依し、法を灯明とせよ」の遺教といわれるものは、いつの時代にあつても教団を指導する精神的支柱であつたと思います。さきに述べた令法久住ということは、仏にかわる依りどころの確立をめざすものにほかありません。入滅後の邪義を破斥し、仏の教法が真理であることを宣揚するためには、仏の入滅を如何に解釈すべきかということ、まず解決しなければなりません。大般涅槃經には、全巻にわたつて仏が常住であることを繰り返して強調しており、また、仏身を肉身と法身に分け、肉身は衆生利益のために一時的に化現したものすぎず、真実の仏身は生滅の世界を超えた法身であると説き、入滅した仏身は肉身であり、法身は常住である、依りどころにすべき仏とはこの法身のことであるから、仏は常住である。したがって、入滅すなわち涅槃とは肉身が減することのみを意味するのではなく、むしろ、その肉身を通して不生不滅の法身の實在を自覚することが涅槃である、と説きます。それまでは、涅槃の語義が煩惱を減するという意味で、解説と同義に理解されていましたが、この法身常住という思想を通じて異なつた面から涅槃が解脱や如来

(仏)や法と同じ意味に理解されるようになります。常住の法身が涅槃なのです。かくして、仏滅という危機を克服すると共に、いつの時代にあつても、この法身を依りどころとして仏教を宣布することができま。

ところで、当時の社会相は如何ようだったでしょうか。涅槃經みずからが語るところによれば、貨幣経済体制が確立して商業が盛んであり、貴金属宝石類が豊富であり、酒場、売春、賭博などの享楽生活が発達しており、一方では、国土が荒乱し食糧の困乏がはなだしく飢饉を招いていたようでありま。繁榮の中に貧困がある、といわれる現代の社会に似ております。このような社会にあつては、精神生活の向上を期待する仏教の受容が困難であることも現代に似ています。しかも、このような享楽風潮は教団内へも影響を及ぼし、僧侶の墮落は目にあまるものがあつたようです。經中のあちこちに惡徳腐敗の僧侶の非行について述べています。欲深く財産を蓄え、酒色にふけり、貪嫉心をいだく破戒の僧侶の状態を詳しく説いて、獵師が法衣を着けているようなニセ坊主が横行している、と歎いております。教団内外におけるこのような時代相がまじめな仏教徒をして危機感を一層強くあおつたものと思われま。かくして、涅槃經では、法身の常住と共に、戒律の護持復興を強く訴えているのであります。教団

自体の危機を克服するためには戒律遵守による僧侶の自覺に俟たなければなりません。

古来より大乘涅槃經は「扶律談常」の教えであると云われています。扶律とは、混亂した社会、墮落した教団に戒律の扶持を説くことであり、談常とは、法身が常住であることを談ずることでありま。この經典がその当時の危機克服を契機として出現したものであるにしても、なにか、わたくしたちの時代を予言して説いてくれたものではないかと思われてなりません。とくに、僧侶の墮落ぶりや社会の乱れを読みますと、肅然として襟を正すことを覺えま。經典は決して過去の記録や物語を中心にした神話文学に終るものではありません。現代に生きた指針として、仏道を志すものにとつて有効適切な助言を与えるものであることを、あらためて知らされるわけです。

大乘涅槃經には、そのほかいろいろのことを説いています。が、ここでは、危機意識ということを中心にしなが、とくに現実の反省(扶律)と理想の追求(談常)ということを述べた次第です。



お歌をいたたく

三心の中の至誠心のころを
往生はよにやすけれどみな人の

まことのころなくてこそせぬ。

(勸修御伝 第三十四)

「よに」はこの世の中にあつてということでは殊の外にという意。「せね」のせは、するという意味で、ねはこそに係つて否定を意味します。そこでお歌の意味は

極楽往生はこの世にとりわたやすい事であるけれども、誰でもまことの心、即ち至誠心がなくては、往生できない事である。となります。

まことの心は人として最も大切なもので、この心の多い少い、厚い薄いによつてその人の品性が定まるといつてよいでしょう。ましてお念仏を修するのに際して、この心が欠けていてよいわけがありません。この至誠心についての解釈は、善導大師の説が基本をなしていますので、次に引用します。

「至とは真なり。誠とは実なり。一切衆生の身口意業に修する所の解行必ずすべからく真実心の中になすべきことを明さんと欲す。外に賢善精神の相を現わし、内に虚仮を懐くことを得ずれ、貧賤邪偽奸詐百端にして悪性侵め難く、事蚊蝎に同じきは、三業を起すと雖も名づけて雑毒の善となし、また虚仮の行と名づけ、真実の業と名づけず。もしこの如き安心起行をなさずは、たとえ身心を苦勵して、日夜十二時急に走り、急になすこと頭燃を払うが如くする者も、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を廻してかの仏の浄土に生ぜんことを求めんと欲せば、これ必ずす可なり。

もし善の三業を起すば、必ずすべからく真実心中になすべく、内外明闇をえらばず、みなすべからく真実なるべし」

次に法然上人のお詞を引用しましょう。

「至誠心というは真実の心なり、身に礼拝を行し、くちに名号をとらへ、心に相好をおもふ、みな真実をもちひよ」(三心義)

「至誠心といふは、真実心也と釈して、内外ととのほれる心也。何事をするにも、まこと

しき心なくては成する事なし」(十二個条問答)

「至誠心とは真実の心也。往生をねがひ念仏を修せんにも、心のそより思ひたちて行するを至誠心といふ。心におもはざる事を外相ばかりにあらはすを虚仮不実といふ也」(念仏往生義)

「至誠心というは、あみだ仏を頼奉る心也」

(十二問答)

「一向に帰するは至誠心也」(東大寺問答)

「ただ内心にまことの心をこして、外相はよくもあれ、あしくもあれ、とてもかくてもあるべきにやとおほえ候也。おほかたこの世をいとはん事も、極楽をねがはん事も、人目ばかりをおもはで、まことの心をこすべきて候也。これを至誠心と申候也」(御消息)

「至誠心というは真実の心也。真実というはいはく、内はむなくして外をかざる心のなきを申也」(大胡太郎実秀へつかはす御返事)

「決定往生せんずる也と思取て申す念仏は、誠の心を至さんと教る至誠心もこの心に納りぬ」(諸人勸化のお詞)

仏教とキリシタン信仰

—その2—



—東京大学教授—

岡田章雄

山口県で、はじめてキリシタンのために、大内の没落したあと、太友宗麟の弟の善長という人が後を継ぎますけれども、その人が出した有名な、山口の大道寺の裁許書というのがあります。

「周防の国吉敷郡山口県、大道寺みちみちの待従西域来朝之僧にまかせて裁許せしむる所件のごとし」そして、この寺の名前というの、ちよつとおもしろいと思います。キリシタンの教会ですから、仏教のお寺の名前をつけるのが妙なんです、当時はあちこちに出来た教会に大道寺とか、天門寺とかをつけています。デュスイットの報告書ではTENMONJIとわざわざローマ字で書いてあり、天に入るの門という注がつけられている。この事によって漢字で書いてたようです。しかるに、布教の用語は、色々キリシタン用語を用いたにしても、全体としては仏教的色彩をぬけきれない。ザビエルは、鹿兒島の福祥寺という禅寺の忍室和尚と大変仲よしになり、色々話をしているが、そのときに、かれは、非常によく日本の仏教の研究をすることになります。日本のお寺に入ってみると、禅宗なので雲水が

座禅を組んでだまっている、そこでザビエルが「この坊さんは何を考えているのか」と聞くと、忍室和尚は「お布施がどのくらいかとか、新しい衣を作らなければとか、いう風に考えた、どこへ遊びに行こうか、などと考えている」と言ったという話が、フロイスという本に出て来ます。

この話の本意は、日本の仏教というものは仕方がない、という書き方で、フロイスは紹介している。実はおそらく忍室は、禅宗の教理とキリスト教の教理とは、およそ相互に話し合ってもわからない、理解しえないものとして、禅宗の立場から飛躍してしまい、それをとげた調子をもつてやりすごしたかと考えられます。禅宗は非常に、キリシタンに論争をいどむ、これは研究的態度なのです。カトリックの方でも、禅宗の方でも、お互に教理についてつこんで研究しようという、程度の高い論争が両者に行なわれました。それで禅宗の坊さんが一番転向しており、また布教に協力しています。禅宗の坊さんが他宗より一番転向したのは、理論を追求していることとする態度がよく、その点、キリスト教

も同じであるが、そのため論争がたえず行なわれていきます。それは、結局キリシタンの理論は自然科学のうら付がある。

例えば、天文学とか、世界地理学です。日本では、当時は中国からきた東洋の自然科学の知識しかないのに、カトリックの人達は非常に広いバックがある。神学は、一つに統合されており、論争で負けてしまうと、これにより、新しい宗教は、たのもしい宗教だ、というで転向するのです。そのなかで一番の論点は、まだ、ザビエルが日本に居た時に、ザビエルと一緒にやって来たコスモ・デ・トルレスというパードレがいました。パードレとは神父、これは父親という意味で、日本では今神父と訳している、英語ではファザー、これを漢字に表わすと波天連となります。この、コスモ・デ・トルロスが、日本の禅宗の坊さんと論争したおもしろい記事があります。

ツクの方では、日本のいわゆる祖先崇拜と結びついた信仰というものは理解出来ない、また、そこへキリシタンの信仰をもつて来て、どうしてキリシタンの信仰が広まっていったのか、これはまだ大いに研究をしようとする事なんですけれども、とくに、その事の注意を引くのは、フランシスコ・ザビエルが自分で書いている手紙の中で非常におもしろい記事があるんです。これはあまり人が問題にしていけないようですけれども、ザビエルがいろいろ仏教の事、坊さん達の生活の事、そういうものをこの手紙の中に非常に詳しく書いてありますが、その中にこういう事を書いています。

日本の信者は、つまりキリスト教信者には一つの悲しみであります。それはどういう事かという私達が教える事で地獄に落ちた人とははや、ぜんぜん教われないというんです。これを教えると、日本の信者は非常に悲しむという。これは今まで仏教の教えを信じていた人達が、キリスト教の教えに入ってその人達が非常に悲しむのは、すでに地獄に落ちている人達は救われぬ、と教えるというんです。

「つまり、死んだ両親をはじめ、妻や子供や祖先への愛のゆえに、かれらの悲しんでいる様子は、非常にあわれである。死んだひとの為に多勢の人が泣いている。そして、私にあるいはどこしもの、あるいは、いのりを持って死んだ人を助ける方法はないかと尋ねる。私は助ける方法はないと答えるばかりである。実はこの悲しみは非常に大きい、けれども私は彼らが自分の魂を、旧霊をゆるがせにしないように、又、かれらが祖先とともに永劫の苦しみに落ちないようにと私は望んでいるのであるから、かれらの悲しみについて私は別に悲しくはない。つまりあなたが、この信仰に入れば、あなたは救われる、天国へ行けると教えている。あなたの先祖の事は全々考えていないつまりその人だけです。教うという事だけ、いわゆる個人主義なんです。そんな事を考えているんですから「私は悲しく思っていないけれど神はなぜ地獄の人を救ってくれないのか、なぜ地獄に落ちた人は永劫に地獄にいななければならないのか」という事の質問が出るので私は、それに彼等は自

分の祖先が救われるということ、なくことをやめない。私がこんなに愛している友人、つまり信者達がどうにも手のほどこしない事について、泣いているのを見て私も悲しくなる」と。この問題をどのように解決したかというところが、大きな課題となった訳ですが、

今までの宗教というものを全部破棄しているとともに、先祖の崇拜がキリストと結びつかない、その所を日本のキリシタン信者というのはどういうふうに解決したかという事は、非常におもしろい問題だと思っています。

それから、もう一つ別の資料で、これは他はキリシタンの宣教師で、サビエルよりずっと後になって来た、ルイスフロイスと言うバードレがおりまして、有名なフロイスの日本史という本を書いています。フロイスの日本史というのは、サビエルが日本に初めて来て布教した事もフロイスが自分で方々歩き色々な話しを聞いたたり、足で歩いてあちこちから材料を集めて実にくわしく書いています。フロイスの日本史というのは、そんな意味で是非読んでみると大変良いもので、たとえば福祥寺で禅宗の坊さんと、とほけた話し合い

をした話しなども、このフロイスの日本史の中にはじめて紹介されている訳なんです。そのフロイスがヨーロッパの風俗と日本の風俗がどんなに異なるかという事をまとめた記録があります。

これは非常におもしろいもので、日本人の顔はどうだとか、日本人の体つきはどうだとか、そんな事から始まり男の服装女の服装、日本人の食物、日本人の家の建て方とか、あるいは日本人の武器はどんなものを使用しているか、それを一つ一つヨーロッパと比較して話している訳です。今でも人を呼ぶとき外国人はこう呼ぶとか、日本人はこう呼ぶというなど、いろいろ正反對のことを書いた本であります。外国人が日本に来ると、それに気がつくらしいし、日本人も又そうですが、そのの一番初めの形です。これは秀吉の時に書いたものですから、その中に仏教の坊さんの事を書いたものがあります。これは、フロイスが言っているものであって、彼れの日欧文化比較という記録であって、その中の第四章に、坊主及びにその習慣風習に関する事という、一章があります。坊主というのは何か悪い

印象がありますが、この時代は坊さんに対する尊称なんである。と言うのは、スペイン人やポルトガル人が坊主という言葉をいつもつかっています。ボンズという言葉から出ているのですが、日本からポルトガルに伝わり、ポルトガルの言葉の中に入り、今でもボンズという言葉を使っています。日本からポルトガル語に入ってしまったのに、ボンズの他に「ビョーブ」という言葉が有ります。それから「カタナ」「ウラシヤ」などがあって、それが動詞となり「カタナール」はカタナで切るという事、それから刀で切られたというのを「カタナード」それから「ウルシヤード」は「うるし」をぬられた、つまり、うるしぬりの箱という時に使っています。ですから日本から逆にカステラと、カップとか言う、むしろから来た言葉は沢山有りますけど、それと逆に日本からポルトガル語に輸出されてしまつてポルトガル語に入ってしまったことばも色々あります。

いまフロイスの書いたものを、一、二紹介しましょう。

「我々（カトリックの場合）人は罪のつくな

いをしてその魂の救いを得るために教団に入る（ヨーロッパの場合）日本の場合は坊主達は、悦楽と休息の中にくらし、労苦から逃れるために教団に入る。次に我々の国では靈魂の潔白と肉体の清浄とをただちに制約する。坊主たちは、あらゆる内心のけがらわしさと肉体のあらゆる、いまわしい罪とを誓う。

我々の間では、修道僧は常に平和を念願し戦争が彼等にとっては深大な苦痛である。日本の場合根来寺の坊主達は戦争を仕事として戦争におもむくために領主達に雇われる。我々の間ではゼウスに誓ったことを完全に守るべく努力する。坊主達は概念には肉も魚も食べないと公表するけどほとんどすべての者が、かげでは食べている。我々の間ではどんな場合でも王侯や、領主の伝令となつて行くことはない。ところが日本の大名は坊主達を伝令として、又戦争の武略として使う。（これは坊主が戦争のとき仲達することを言っている）我々の国では修道者が結婚すれば背教者となる。坊主達は信仰にあきると結婚するか又は兵隊になる。我々教団の間では後継者は相続にはよらず選挙及び、徳の高さによ

る。坊主達の間では上長の者が子供の時から後継者と定めた者を後継者とする。我々の修道者はヒゲをそり、頭の上をそる。これは四ヶ月ごとにやるのである。我々の間では冷節とよき模範とを高く評価する。坊主達は常に足を現わして歩く。我々は来世の栄光と靈魂の不滅を信じている。禪宗の坊主達はこれをすべて否定して生れること、死ぬこと以外は何もないとしている。

我々はどんなことにも増して悪魔を嫌い、憎んでいる。日本の坊主は悪魔を尊敬し崇拜して、悪魔のために寺院を立て多くの供物を捧げている。（これはおそらく寺の中のエンマとか天狗とか風神、雷神を祭って、これを礼拝することを言うのであろう）我々は立つて説教を行い手を動かすことにより「しぐさ」を表わす。坊主達はすわって説教を行い「しぐさ」に手を動かさず頭によつて行う。我々は説教壇で説教を行う。坊主は大学の教授のように椅子にこしかけてする。我々は祝福されたコンタスや聖者の遺物を無償で他の人達にやる。坊主達は紙に書いたお守り札を沢山の銭を取つて与える。我々の司祭は死者の葬

式を教会でとり行う。坊主は死んだ人の家で、たびたび回を重ねて行う。そこで飲んだり食べたりするためである。西欧では、主人が死ぬと家来達は墓まで泣きながら送る。日本では主人が死ぬと家来は腹をさき、多くの者は指先きを切つてしかばねを焼く火の中に投げ込む。

その他、カトリックの坊さんと日本の坊さんのいろいろな対照（コントラスト）を非常に詳しく書いているのを紹介した訳です。大変ごたごたした体系のないことを話したのですが、ようするにキリシタンの信仰と仏教の信仰の問題は大変おもしろいし、我々としては是非やらなくてはならない。しかしそれをするには当時の歴史をやっている人と、キリスト教の経験があり理解した人と、今の仏教の教理の専門の人と、カトリックの神学の人などの協力が必要で、本当の意味での総合研究で、これからもっと詳しく研究する必要があります。まだ出来上がったことを話したのではなく、これはむしろ序の口であつて、こんな問題であり、テーマがあるんだということを示したまでです。

（終り）

一名士訪問

葛西宗貫宗匠

裏千家業体



裏千家の縁の下

「もうこの道も二十年になります。二ふしです」

銀座のレストランで会った宗匠は、童顔をほころばせながら、そうつぶやかれた。四十の坂を已に越した人と見えぬのは、この人の持ち味であろうか、それともいつも若くて美しい人々に囲まれて、楽しい茶の道を歩んでいるからだろうか。

「人生というものは分らないもんですね」

いかにも感慨深げに語られるのも無理はない。「寺に入ったのは、小学校四年の時でした何も分らぬながら、寺生活をして、いつの間にか仏教専門学校に入っていたんですからね」

宗匠は、建築屋の五男に生れ、十一才の時に京都の寺に小僧として入り、戦前は已に一人前の坊さんになっていたのが、戦後二十年の今は、裏千家の縁の下の方持ちとして、十五代、千宗室師の助力者として、押しも押されぬ実力者となって働いているのである。

「戦争が、私の人生を変えたとも言えますね」

戦後、世の中が混沌としている時、宗匠は何か趣味の世界の中で生きて、この混沌に安らぎを得たいと願った。

「幸にも、兄が裏千家でお茶をやっていたのでね、入門する事が出来ました」

その兄というは、已に茶室等の写真では、当代第一人者となっている葛西宗誠氏のことである。

業体修行十余年

「今の裏千家の役どころは、何ということになるんです」

「業体です」

一寸、聞きなれない名前である。しかし、茶の世界では業体というのは、仲々に

重要な役所であり、しかも、宗家の業体となるには大変な努力と修行とが在るものである。

「まあ、仏道修行と同じ位、いや、今日ではそれ以上の苦勞と努力が在るでしょう」

聞くところによると、業体修行の二年ほどは、掃除や、茶所の準備がすべてで、なかなか静かに茶などを立てている事など考えられないという。生業への礼節や、しきたりもやかましいだけに、ここでは、自由な世界、放縦な考えなどは、無視してかからねばならない。

業体見習になって、本当の業体になるには、十年かかる。それでも、この宗匠などは若い方で、まだまだ上にいるのだそうである。

「裏千家では、十人程いると思います」
百万近い裏千家のお弟子の中での十人の業体とあれば、どれ程に重要な地位にいる事が分るというものである。

不思議なめぐり会

「君、今何しているんです」

こんな会話を、記者が宗匠と交したのも、そう五六年前である。その時、一寺の住持をしていた記者の前に、仏専（今の仏教大学）時代の友人のこの宗匠が、十徳という茶羽織を着て十数年振りに忽然とあらわれた。

しかし、更に驚いた事には、この友人に、記者が茶を学んでいた先生が、盛んに、まさにベコベコと頭を下げていたのである。

「茶をやっているんで」

ところが、已に氏はこの時、業体さんであったのである。記者の茶の先生が、大いに平身している理由もこれで分った。

こんな事が縁で、その後、大学の茶道部などにも協力してもらい、東京教育大学にも立派な茶道部ができ、未だに記者もそこに出入しているのも、この宗匠のお蔭である。

今では宗匠は、裏千家の家元と共に東奔西走するかたわら、教育大学、法政大学、霞ヶ関の警察庁、横浜青年会、裏千家市ヶ谷教室などと寧日なく教授に走り廻っていられる。

記者とのめぐり会う前は、フィリッピンの戦場で死線を幾日も越えた由。

「胸と、右腕に弾丸きずもあります」

今に生き永らえたのも、不思議だという。
「これも仏縁あつての事ですか」
と、高らかに笑われた。

人に頭を下げるつらさ

茶の世界に限らず、いろいろと苦勞のあるのが人生である。

「茶の世界に入つてつらかった事は」

「別に苦しいと思つた事はあまりないです。ただね、業体修行をしていたころ、茶の経歴では、確かに自分の方が永くてもですね。より以上に茶事を知っている人には文句なしに頭を下げて教えを請ねねばならない。こんなとき、自分というものを殺して行くという事は、なかなかつらいもんですね。」

しかし、どの世界でもそうだと思いますがね、これがやり切れぬようでは、教える立場にはなれぬものと思いますね、成程、話を聞いていると、苦勞されたことが、話のふしづしに出てくる。それでも一向にその苦が、顔や姿の中に残っていないのにも感心して、記者自身たいそう反省せしめられた。

今の夫人も、茶を指導しておられるが、やはり茶で結ばれたという事である。

「不思議なものでね、子供もこの頃は茶をやる様になってね、明日始めて人前で本式にやらせてみる事にしました」

小学校四年の小坊さんが、羽織袴で茶をたてる姿を思いうかべて、私はついフキ出しそうになった。しかし、この道はそんな年から芸を身につけてこそ、本当のものとなるのではあるまいかとも思つて耳を傾けた。

物事はすべて心

「茶をやつてみて、大いに得たことは」

「難しいものです。未だ未だ何かを得たという心境ではないです。ただ夢中で生活も忘れて、茶をやっている。そんな所ですね」

「それでも茶道という以上、何かは得られるでしょう」

「もし、何か言えと言われるなら、すべては心だという事を、感得したとも言えます。道具も菓子も、花も、すべて私の心を離れてはないという事が、少し分つて来ま

した。ね。どんな立派な道具を苦勞して持ち出してでもですね、私の心に本当になり切つたものでなければ、茶の中で生きてきません。ね。こうなると、茶は道具でも花でも、菓子でもなく、心だという事になります。まあその程度の事が少し分つて来たといえますね」

一寸、禅の話を聞いているようである。確かに茶禅一味というが、こんなところにもそうしたところがあるのであろう。

もしそうした点では、宗匠は相等なところ自分置いてある事になりそうである。

老人の語り相手になりたい

「将来、この道で、どんな事を考えています」

「そうですね、まだ若いですからね、余り、先々の事も考えていませんがね」

そう言つて、しばらく考えていたが、
「できたら、老人相手に語り合う世界を作つてみたいと思つていますがね」

「随分老人趣味に一気に走りましたですね。若い人相手が二変するんですか」

「いやそれはですね、子供は児童憲章の様なものがありますね、未だ未だ、老人達に、

余生を送る楽しみを与えるだけのものがないでしょう。それでせめて、茶を生かして、そうしたものを作つてみたいと思つてです」

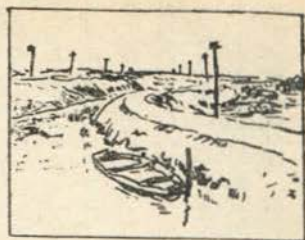
なんでも数年前、老人ホームで茶をやつて欲しいと頼まれ、出掛けて行つた時、そうした事を痛感し、自分も、或る時期がきたらそうしたものを作つて行きたいと、考える様になつたらしい。

「それには、金も要りますのでね、五十過ぎたら少し、金の準備もしたいと思つています。しかし今は、まあ清貧に甘んじて、茶に生きています」

「何かそういう事の中にも、宗教的なものが働いたのですか」

「或は無意識の中にそうした事が働いているかも知れませんがね。しかし、そんなにおおそれた考えではないですよ」

そう言つて、また声高らかに笑われた。
旧友とはいひながら、その道で一人前になつた人々の言々句々には、教えられるものも多く、感謝した。



往一生抄

戸松啓真

(大正大学助教授)

人は信仰がなくても生きることとはできる。

また死ぬこともできる。しかし時には、人は信ずることによって生きる上に或る不思議な力や、信念をあたえられる。またそれは何びともさけることのできない死滅の恐怖を和げることがある。往生という語は、古くは支那において梵語經典から漢訳された無量寿経や阿弥陀經に見ることができ、それによると極楽浄土へ「往いて生れる」ことである。それはこの世の穢土を去って、あの世の浄土に生れることである。従って必ず死を媒介とする。それゆえ後に、日本の通俗語では死と同じ意味につかわれた。その人の往生は立派で

あったというがときである。このように往生という語は、一般にはたいした矛盾もなく生と死との相反する二つの意味をもつ言葉として用いられてきた。

仏教ではこの世で人間が迷い苦しむのは、人間に煩惱があるからとする。そしてその煩惱は、人間の生死そのものから起りきたるものとみる。むさぼり(貪)といかり(瞋)とおろかさ(痴)は、いろいろな煩惱の根本となるものである。釈尊はそれゆえ、生と死を四苦の中に入れて老病と共に、いかにしてその苦から脱すべきかを求道の出発点とされたのである。このように煩惱は、人間の生死そ

のものに深く潜在しているものであるが、多くの人はそれを自覚しない。ちょうど本当のことは何も知らないのに、知っていると知っている人が多いように。そして煩惱は時には人間を破滅におとし入れる。そればかりでなく、ひとりの人間の煩惱は多くの人を集団を国家を破滅にいたらしめることさえある。しかしながら仏教は人間の本質を、このような灰色の面だけとみるのであろうかというところではない。一方では煩惱をみとめながら、他方では「一切衆生悉有仏性」というように、どんな人間でもみな仏となるべき本性があるとみるのである。そこに明るさがある。

正しい仏法によるならば、悪人も仏になれるのである。人間が仏法を見捨てても、仏法は人間を見捨てることはないのである。大乘の仏教では、人間の生死そのものに根ざす煩惱を消滅させるのに二つの法があるとす。一つはこの世において自分の力で煩惱を消滅させて、四乗の果を得ようとする「聖道門」である。いわばこの世で悟って仏になることである。これは非常に困難な道で、すでに大乘月藏經というお経に、これまで一人も成就した者がいないと述べている程である。聖道門とは日本の宗でいえば、真言、天台、禪などである。さてもう一つは「浄土門」である。これは浄土に往生して、煩惱を滅して仏になる道である。浄土に往生するということは、この世の生の彼方に死して生れることである。そのためにわれわれは生きている限り念仏を申すのである。なぜなればわれわれの申す念仏とは、往生のために仏と釈尊がえらばれて付属されたものであるからである。それが他力の念仏である。念仏はどこまでも、われわれがとなえる念仏であるが、一声一声の念仏で往生がきまるのは、仏がおきめになったものの

だからである。「阿弥陀仏は一念に一度の往生をあておき給える願なれば、念ごとに往生の業となるなり」とは法然上人のお言葉である。そして法然上人が念仏は一念でも多念でも同じく往生するといわれたが、しかも生きている限り相続せよというのは、いかなる意味であろうか。一念で往生できるなら、多念相続の必要はないのではないかという思いがする。ここで法然上人が「十二箇条問答」で述べられた次のお言葉を思いおこすのである。即ち「つねに臨終の思いをなしてとなうべし」と。そして平生の念仏と臨終の念仏とは何の変りもないのであり、「平生の念仏も死ぬれば臨終の念仏となり、臨終の念仏もなれば平生の念仏となるなり」（念仏往生要義抄）といわれている。このことは平生の念仏というけれども、よくよく考えをいたせば、臨終の念仏と何ら変りはないのではないだろうか。今日一日生きたということは、今日一日死んだことである。五十年をよくも生きてきたということは、実は五十年死んだことである。あと二十年の生しか残されていないということであろう。そのことは、生と思

っていることは死でもある。即ち生の中に死が入りこんでいることである。念々生死である。念々生死であるから、往生のためには念々相続が大事でなければならぬ。法然上人が一遍の念仏であらうといふような一念往生義でもなく、信の一念以後の平生の念仏は報恩の念仏であるというようなものでもなく、死ぬまで念仏を申せと説かれたことは、煩惱具足のわれわれに深い意味があるのではないかと思う。それを自力的などというのはあたらないのである。

過日、ある真宗寺院の仏教文化講座で「法然上人の念仏」という話をした時、一つの質問を受けた。その聴衆はあらかじめ聞くところによると、五十人位が常連で真宗の教えには相当知識のある者、あとの五十人位はその都度の聴衆とのことであった。質問というのは、親鸞聖人が宝治二年に書かれた「高僧和讃」によると、法然上人がなくなられた時に奇瑞があったというが、それは本当であるかというのである。それに対して、私は次のように答えた。法然上人の伝記によると、臨終の幾日か前にお弟子が病床の枕元の弥陀像

の御手から、臨終の行儀に従って五色の糸をおとりになるようすめられた時、上人はそれのようなことは必要ないとこれをしりぞけられたのである。また法然上人と同時代の天台の慈円僧正の「愚管妙」という歴史書には、法然上人の御往生であるから何か特別なことがあるかも知れぬと人々が集ったが、さしたることもなかったと記していると答えた。すると再び質問者は立った。そして親鸞聖人がそのように書いたのであるから、それは事実ではないかと繰返した。私もまた同じ答えを繰返した。ただこのように言葉を加えた。即ち宗教的眞実というものは、或る者には事実であるが、他の者にはそれが事実でないということもある。親鸞聖人はそのような師の奇瑞をかたく信じていたのであると。こんどは質問者は、笑いながら引き下つてくれた。あとで控室で係の方から、あの質問者はなかなか執拗で、一回や二回では引き下らないのに、今日は珍らしく笑顔をみせたというのを聞いた。私はその質問者がどうしてあのような質問をしたのか、はかりかねたが恐らく私のした「法然上人の念仏」の一部

に、上人の念仏は平生即臨終の念仏であって煩惱具足の人間なるが故に平生の相續を重んじるのであるということ聞かれて、法然上人の臨終の奇瑞を認めさせることによって、親鸞聖人の現世主義的な念仏に対して、法然上人の念仏は来世主義的ではなからうかという公式論を引き出させるためではないかとも思ったのである。

後日、法然上人の最後の場面をしらべてみるため七つの伝記をみた。そのうちの一、二のものには、臨終にあたって弥陀三尊の来現を見たという弟子についてのべられていますが、多少の潤色はあつても、特に奇瑞を強調しているものはないのである。このことと臨終の行儀をしりぞけられたということから、私は法然上人の念仏が臨終よりも平生に重きをおかれたものと思うのである。(ただどの伝記も御臨終の幾日か前に紫雲がたなびいたということは共通して記していることである。が紫雲については別の機会にゆずる)さらに法然上人の弟子であつた親鸞聖人も、平素の言葉として「某閉眼せば、加茂川にいでて魚にあうべし」とのべられたとい

うがその最後は「伝絵」によると、口に世事をまじえず、ただ仏恩の深きことをのべ、声に余言をあらわさず、専ら称名たえることがなかつたのである。また同じく法然上人の念仏の流れをくむ法孫一遍上人も、かねてお弟子が上人の臨終についてたずねられた時、よき武士と道者は、死することをあたりに知らせぬことぞといわれた。そして自分が死んだ後には「野に捨て獣にほどこすべし」といわれている。また往生の前に、弟子が紫雲のたなびいたことを申し上げると「さては今明は臨終の期にあらざるべし。終焉の時はかような事はいささかもあるまじき事なり」とのべられた。正応二年八月二十三日の朝早く阿弥陀経の読誦の終るとともに息たえられたが、諸人さらにこれを知らずという。それが一遍上人の最後であつた。

三人のよき念仏者は、ひたすら往生のために念仏を申された。念仏のたえた時がいちのたえた時であつた。そしてその念仏は、現世においては自らの生の支えとなつて、たくましい生命力を発揮された。



須藤 隆 仙

(北海第一教区教化団副団長)

輪島聞声尼の父親

一
輪島聞声尼と申しますと、ご承知のように東京小石川に淑徳女学校(現在の淑徳学園)を創設した、浄土宗の有名な尼僧であります。

このお方は北海道の松前の出身でございます。松前にもと福山と申しましたが、その輪島屋という質屋の娘さんでありました。両親がたいへんな信心家で、その尊縁により尼僧となり、ついにこのような立派なお方となられたのであります。

二
ところで、私は最近、ふとした因縁により

この輪島聞声尼のお父さんについて、＼そのひととなり＼を知る貴重な史料に接することができました。それを見て、なるほど＼この親にしてこの子あり＼お父さんが立派であられたから、娘さんもあのように立派な尼僧さんになられたのだと、感心いたしました。以下その史料をご紹介しますと、昨年の暮、私は函館から少し離れた上ノ国町字木ノ子といふところの、光明寺といふお寺にお十夜の布施にまいりました。そのさいお檀家の石沢市次郎さんという宅に貴重な軸物があるといふことで、同寺の平田順泰住職のご厚意で、その軸物を見せてもらったのであります。

す。ところが驚いたことに、その軸物のうしろには、つぎのような一文が墨書されており、しかもそこに「輪島屋太左衛門」となっており、聞声尼のお父さんの名前がついているではありませんか。私はビックリいたしました。これと同類の軸物はこれまでも見えられておりますが、今回のものはつぎのような理由で、とくに貴重でありました。

三

まずその軸物の背面の文章を全部記しますと、つぎのとおりであります。(仮名づかい、句読点などは筆者において適宜整理した)「それ恭くも五常の道を守るは天道にあいか

ない、普く四恩を報ずるはこれ日本人倫の常なれば、誰人が感賞せざらんや。君は民の親なり。民は君の子なり。民の君を思うこと、子の親につかうると同じく、誰か人に劣るべく、え思いならざめれど、事に臨んではたえずおちおくる事のある、日頃の心ざし見得ていと恥しきわなれかし。

そもそも我が君御世御世にかしこくおわし給いける中におん殿になりて、わきておんいつくしめ深し。よろずみ心を入れてまつりことさせたまいつつ、民を子の如くに恵みやしなわせ給えば、くぬちならぬ者まで親見る如くに仰ぎ親しみ奉りけるを、こそ春、わりなき仰せや有りて、エゾが島々残りなう江戸に奉らせ玉うことにぞなりたりける。四百年こなたしろしめしき玉いける国を、俄かに失わせ玉う。他に有るをかわりの国さえ今だ賜らざりけるを、ゆゆしき国の御大事にして眉をひそめぬ人はあらざりき。されば年頃かちきける御心づくし、海の波の大海原の塩のしづくをもかえて奉るべきは、さる時になんありけるを、仲々に身を惜しみ、家と思う人のみ多くて、日頃親と頼みたえける君の御

上をば、たかまの山の白雲にて、それ救い奉らんといはいとまれなりけるを、人々は恋しき要に立ち別れ、悲しき子をふり捨てて、君を思い奉る心ならず、唯一筋に思いたち、海山へだたりたる遠き旅路にさまよい立ち、いと止ん事なき渡りをうちおとし奉りたるなど、見る人きく人誰かは袖をしぼらざりける。さればその御替里にて、みちのくの伊達の郡と、いでゆの村山の郡と、二郡のうちに四万石の国に、年ほどに一万八千両の黄金さい、うつそわりて給うせ玉いければ、いささかその甲斐あるやうにて、なぐさむ貌だもはあれど、もとのさまに似るべくもあらねば、なお本意なくこそ思われ。されば君の深くわたりて御家のしないたくのほらせ玉いたるに、あなうちにおしつけたるおこないせんも仲々なる業なれば、年月ふるにそいて怠りやすきは人の心になんありけるを、よきついでできたらんずる、いとど同じ心とつかたみに足るをなん一軸つつち玉え伝えぬる。

安政四年巳正月

松前福山御城下

輪島屋太左衛門

四

さて以上であります、これについて説明いたしますと、エゾ地といわれた昔の北海道は、二度ほど幕府が直轄したことがあるのであります。それは江戸後期になると、ロシアの勢力が南下してきたり、アメリカが函館の開港を求めるなど、松前藩だけにエゾ地をまかせておくことは危険な状態になってきました。そこで幕府は寛政十一年（一七九九）から文政四年（一八二二）までと、安政元年（一八五四）から明治維新までと、二回にわたりエゾ地を直轄したのであります。初回のときは藩主を福島県の梁川に移してしまふほど嚴重なものであります。しかし文政四年にはエゾ地は再び松前藩に返され、藩主も松前へ帰ったのですが、それから三十余年を経過した安政元年に、エゾ地は再び幕府の直轄となったのであります。

二回目のそれは松前城下付近の極くわずかの場所だけは、松前藩主のために残しておきましたが、しかし初回の直轄でこりた人たちが、忠心から藩主をあわれむ家臣たちは、猛烈な復讐運動を起しました。

さて、聞声尼のお父さんである輪島屋太左衛門も、民間人としてこの復領運動に参加した一人であります。

右の文書はそれに関するものであります。

五

太左衛門は五常の倫理をとき、四恩に報ずべき旨をうたえて、一日も早くエゾ地がもとのように松前藩の手に返るように、多くの人々にはたらきかけて、運動を展開しました。人々の中には仙台に行き、仙台侯の手をかりて復領を実現しようとした人もおり、また江戸まで出て、老中に直訴して捕えられ、そのままで現われました。

太左衛門は仙台や江戸へは行きませんでした。が、エゾ地において大いに運動しました。信仰家である彼は、神社に祈願したりなどもしました。

このような猛烈な復領運動のため、幕府はついに折れて、陸奥の梁川（伊達郡）と出羽の東根（村山郡）とを合せて三万石の土地と、出羽尾花沢の地一万三百石余を替え地として松前家に与え、そのほかに年々一万八千

両を支給することとしました。松前藩はこれまで、わずか一万石の格式よりなかったのですが、これで四万石に上格しました。しかしだからといって、エゾ地そのものが松前藩に返ったわけではありません。

住民の復領運動はこの替え地の給与で中止されました。このときに太左衛門は、自分の持っているたくさんのお物の裏に、復領運動をした記念の文書を記して、かつての同志たちに贈りました。私がいまここに紹介したこの軸も、その中の一つのものであります。

これまで発見されたこれらの軸物には、大雅堂や東草の画などもあり、また伊藤東涯や大窪天民の書などもあります。私が見せてもらったこのものには、表木の側に「庵人の筆、花鳥」とあって、鶏や小鳥を配したいわゆる花鳥の画の下に「呉春」と読めそうな落款があるのであります。もし呉春だとすると、蕪村や応挙に師事した四条派祖の松村呉春かも知れませんが、私はこのほうにはあまり明るくありませんので、軽はずみなことは申されませんし、またこのさい画や画家は問題としなくともよいのです。

六

ただここで注意しなければならぬことは、この文章では、太左衛門が、強く復領運動を願ひ、替え地を与えられても、なお機あらば復領を実現させたいと念願していることであって、他の軸物（すでに発見されたもの）にはそこまで書いておらず、ただ替え地の下賜を喜んで「その名譽国に輝き万世に伝わる」などと結んでいるのでありますが、こんど見せてもらったこれでは、あくまでも復領を願う太左衛門の心底がよく表われており、そういった意味では、これまで発見された他の軸物とは全く違った価値をもつものであり、また太左衛門の「ひととなり」を一層よく知り得る資料でもあるわけです。

文中にはまた、この重大事にあたって、なら報恩に身を挺しない人たちのことが、はげしく非難されております。

これらを要するに、聞声尼のお父さんである太左衛門という人は、ひじょうに人倫をわきまえた人であり、正義の人であり、勇気のある人であり、また純情の人のようでもあります。

そのうえたいへんな信心家であり、その頃の福山の町に和田瑤門という仏教学者がおり、その方呼んで、よく仏教の話を聞いたといわれます。

このような人を父ともった聞声尼は、幼名を「こと」といいましたが、父母と一緒に小さい頃からよく瑤門から仏教の話をききまし

如月に思う



如月(二月)この月は私達に反省と期待を与えてくれる月と思います。

「一年の計は元旦にあり」と、いわれますように本来ならば正月に新たな年の計りごとを立て、希望に満ちた新春を迎えようとするのは世の常でございましょう。しかし正月はすべてのものが新しく見え思えますが、お屠蘇気分にかれていっているうちに一

た。母もまたたいへんな信仰家であったのです。そしてついに十八歳のとき瑤門の弟子となつて仏学をおさめ、やがては江戸へ出て、当時日本国中に名の聞えておつた、福田行誡上人のもとに弟子入りして聞声と名のりしました。行誡上人はその頃兩國の回向院におりました。ときに明治九年、聞声尼は二十五歳で

年の誓いどころかとんだ失敗をしてしまうことも多分にありがちなことです。

如月(二月)北国は雪に覆われ、暖かい地方でも朝夕の寒さが厳しい季節、すべてのものが封鎖的になりがちな厳冬期ではありますが、反面私達に今までの失敗の反省と新たな期待とを心の底から沸き出させ、考えさせる季節であると思います。この季節を人々はどうのように受けとっているのでしょうか。

四月に新入学する幼児は待ちこがれて希望に胸をふくらませる季節でしょう。三月にそれぞれ所定の学窓を巣立つ学童・生徒・学生の中、進学する者は悔いなき結果を得んため

に・実社会に飛び出す者はその心構えを練るありました。そのご京へ登って知恩院の学校に学び、尼僧学校の必要を感じて宗務所に建議、かくて実現したのが、現在日本にただ一つよりない尼衆学校であります。その後明治二十五年には東京に淑徳女学校を建てました

聞声尼の尊い生涯には、父・太左衛門の「ひととなり」が多分に影響していると思います

ために、各々最後の勉学に勤しむ季節でしょう。またすでに実社会で働いている人々は定期異動・昇級・昇給・勤務評定等々の噂さに一喜一憂する中に己れを反省する季節でしょう。定年退職をひかえた人々はずれまでの充実した人生を更に飛躍させんがために小休息をしようとする季節でしょう。

以上は私達の周囲で如月を迎えた人々の心構えの一端です。如月は気候の上では厳冬期ですべてのものが冬眠中であり鈍い行動をとりがたですが、この如月はうららかな春を迎える準備期間として一番大切な時期であり、より効果的に過した人に本当の春が訪れるものと信じます。



四苦八苦 — その六

恨みの七害（怨憎会）

渋谷 賢 応

人がこの世に生きていくと言うことは、この世の生きとし生けるすべての人々よりのお恵み、お世話によるものでございますが、さてそのお世話になり方が間違えますと、これが恨みとなって反目し合う結果となってしまいます。まことに愛情と怨恨とは裏腹でしてちよつとしたことよりほんとうの恨みに発展してしまいます。その故に恨みをもつ者は遠い人よりも近しい人、世話になったりなられたりする人の方がより多く、恨みを持つものと共にいるのは耐え難いと思いつつもないければならず、憎しみはまた憎しみを生んでどうにもならない所まで追い込まれても、それでもそれより抜け出すことのできえない苦し

みを味わわなければならないのです。

人生は愛情によってささえられていくもの、面、憎しみによってさいなまれていくもの、よう、悲しいことですがこれが現実の姿と申さねばなりません。

お釈迦さまはこの恨みをもつ姿について、

七つの悪い結果が生じてくるとして次のように説かれておられます。（中阿含經百二十九、怨家經第十三）

第一に顔色が醜くになると申されます。人を恨むときの顔は醜く、恨みを内に抱いている顔色は悪く、恨みを外に出すときの顔は醜悪の極めである。その人がどんなに沐浴して体を洗い清め、どんなに化粧してよい香水を

塗っても、そうすればそうするほど醜さを増すと申されています。

きつい言葉ですがまったくその通りでございます。美しくなるためには、きれいな粧いをするためには、心に恨みなきを期さなければならぬでございます。

第二に安眠することができないと申されます。心に恨みのあるものはどのようなよい床に臥しても、たとえば毛の敷き、羽の布団をかけ、金襴の被いをし、鹿の皮の枕を以てしても、しかもなお憂い苦しんで眠ることができないと申されています。

夜長を、毎夜不眠に襲われるほど苦しいこととはございますまい。そしてまた、どんなし

とねの中でも、すべてを忘れて安らかに眠るほど幸福なことはいません。

第三に大利を得ることができないと申されています。心に恨みのあるものは、利益を得るべきのときに心にわだかまりができて得ることができない。利益を与えようとする人も心のわだかまりを知って与えることができない。いつもわだかまりが行き違いを生じて、利を得るチャンスをとって逃してしまふと申されています。

世話になったりなられたりと言う人生において、よく自分の身のまわりを見まわすときこのようなことが始終くりかえされていることに気づかずにはおられないのです。

第四に朋友がなくなってしまうと申されています。人がもし恨みをつねづねいだき、恨みに覆われてしまい、心中恨みを捨てることができないと、その友を恨んでいなくとも親しい友がその人を捨て、離れ、避け、去ってしまふと申されているのです。

朋友とは心の扉を大いに開き合つて語り合ふことのできる友のことです。開いた扉が大

きければ大きいほど、親しさが深いと申さねばなりません。もし恨みのために扉に暗い陰がさし、中がかげり、門戸が狭められたとしたら、友は離れ去るより外なくなるわけですから。

第五に誓めたたえ合うことができなくなってしまうと申されています。人がもし恨みをもつていれば、そのことにより、今まで誓め讃えた人々もそれをしなくなり、また他人を誓めることもできなくなり、かえつてそのことにより、悪名、醜聞が四方に伝わって恨みはさらに恨みを呼ぶと申されています。

誓め称え合うと言うことは人生の最も美しい姿であると同時に、人生の張り合いでもあるわけでした。誓められるが故に身も心もかるがると動き働けるものでございます。誓められてうれしいことは何も子供の世界だけではございますまい。それが恨みによってでぎなくなってしまうと申されているわけです。

第六に富を失うと申されています。人もし心に恨みをもっていると、立居ふるまいにもそのことが現われ、口には悪口、二枚舌、う

そいつわりを言うようになり、身も、言葉も、心もとげとげしくなる。このことが結局人をして財物を失わしめる結果をまねくと申されているのです。

思ったことは態度に出、思はず口にし、その恨みが積り積って争を生じ、争うことが財を失うこととなると言うことは世間にしばしばあることです。恨みが意地に固定化しますと、人はどんなことでもやりかねない恐しさをもっています。

第七に天に生ずること、言いかえますと浄土に往生することができないと申されています。人もし恨みを懐いたまま身やぶれ、命終る期に及べば、その恨みのために重ねた悪行によって、自ら害し、刀を以て自ら刺し、或は若より自ら投じ、或は縄を以て自らを絞め、必ず悪処に至り、地獄の中に生ずと極論せられています。

恨みあるが故に、浄土往生ができないとお言葉は深く私たちの胸を打ちます。

浄土門徒の自らを正す厳正なる至言と思うのです。

隆寛律師

と

聖岡禪師

—私の二つの念願—

最近私の念願が二つ重なり合ってしまった。一つは隆寛律師が主要人物として登場する嘉禄の法難という史実を、もう少し的確に認識して世に訴えたいということ。

もう一つは聖岡禪師が、戦禍のさ中に在って柿の実を食しながら、僻地にある洞窟で専ら著述に傾倒せられた苦難の生活の迹を顕彰保全したいということである。

前者に関しては、昭和三十七年から心掛けて筆をとり始めたが、隆寛律師の事蹟は、金沢文庫に所蔵されている著書について、平井正戒氏の遺文集によって詳細を知る外は、勅修法然上人伝並びに翼賛などをたよりにする

だけで纏めようがない。然し八十歳の老驥を奥州に配流された律師の像を、何とかして描いてみたいと考えたのである。

殊に律師終焉の地が、私の住む厚木市内に在ることから、事件を一層身近かに感じさせられたし、律師の事蹟を顕彰することに一つの使命感のようなものを感じたので、層々墓参の会など催うしてきた。

二年ほど或る事情から律師伝の原稿が手許を離れていた。既に早く世に出るべきであったが、漸やく機熟して「隆寛律師の生涯と嘉禄の法難」と題して新春早々刊行の運びとなった。

小 橋 麟 瑞

法然上人の撰撰集を口をきわめて罵倒した者に、桐尾の明恵、並榎の定照、鎌倉の日蓮を挙げる外、十指に余る破斥者がいた。中にも定照の「彈撰撰」に対し、律師の「彈撰撰」となり「汝の僻破の当らざることを闇天の飛礫の如し」と言い返され、カンカンに怒った定照が座主円基を動かして朝廷に強訴した。遂に勅許を得て大谷の法然上人の廟墓を破壊して御遺骸を加茂川に流そうとした。日本宗教史上言語道断の汚点を残したのである。更らに八十歳の老律師を流謫するに至った。嘉禄三年六月のことであった。これが所謂「嘉禄の法難」である。

これは撰撰集を中心にした念仏迫害の歴史として頂点に在るもので、単に登場人物が多念義の祖である「律師」でなく、法然上人門下を代表する当時の在京者中の長老としての「律師」なのである。律師の気魄に学ぶべきであろう。詳細は拙著「隆寛律師の生涯と嘉禄の法難」参照。

次に岡師（聖岡禪師）に関しては、五重相伝を創定せられた人師として、それは周知のことであるが、先年来、岡師の聖跡である茨

城島瓜連にある常福寺に結縁して早くも十年余を経過した。その間度々「決疑鈔直牒」十巻を制述せられた直牒洞(じきてつどう)を視察した結果、急ぎその保全を画すべきであることの実状を訴えることになった。

このことに關しては、中外日報、浄土教報等の紙上を通して岸寛勇氏が私の提唱を世に紹介せられた通りであるが、茨城教区に於て

ある死の意味するもの

「五輪成功を祈る……」これは過日悲痛な自殺をとげた東京オリンピックの栄光のランナー、円谷幸吉選手の遺書の一端である。東京オリンピックに際し彗星の如く現われ、日本国民の悲願を荷負い、華やかなフットライトをあびた円谷選手が全く予期しない最極端の最期を遂げたことは誠にいたしいことである。円谷選手をこころで追いやったのは何か。関係者にとつても突然の死で、ただその霊をとむらう以外方法がないほどのショックであつたのであ

る。幸先賛意を表せられ、併せて岡師の史跡としてその顕彰運動にたち上られたことは誠に有難いことである。既に岸寛勇氏の勸奨せられることもあつて義のうを聞いて下さる方も相ついでいるようであるが、今年中には何とか目鼻をつけて頂けるよう、この際誌上を通してお願いする次第である。

叙上のようなわけで、私の念願が昭和四十年。最近の若人の言動にはこの極端を好む傾向があると、一評論家は述べているが、どういうことなのであろうか。羽田・佐世保と続いた一連の全学連の言動、グループサウンズに狂喜する若者の群れ、己れのみを正とする一連の新興教団の若者の言動等々、世間の批判を痛烈にあびた行動。これらはただ一人ではなし得ない群衆心理が大きく左右するものであるが、彼等からは何ら主体性を見出し得ないのが実状である。群衆の中で己れの言動

三年という年に重なり合ってきた為岡師の運動なのか律師の運動なのかと、疑念をさしはさまれない訳でもないのに、両方に関係のあることを申上げて、御協力をお願いします。

(律師著作の方は著者へ直接、岡師の方は瓜連町常福寺中直牒洞保全会へ)

を正しく理解することは困難であらう。しかし未来ある若人として己れの言動に責任を持ち、時のみが解決を与えてくれるという安易な考えを捨て、心静かに考える余裕を持ち合せてもらいたいものである。これらは若人全てがそうであるというのではない。まじめに将来を考え動んでいる若人の方が多いのは当然である。しかしあまりにも極端な言動に走る若者が目立ちすぎるのである。老婆心からの忠告といつてしまえばそれまでであるが、責任を強く感じ一人さびしく死んでいった円谷選手の立場を考えるに、是非若人にこの死の意味するものを素直に受け取ってもらいたいものである。

ハガキによる 伝道



藤井実応

食物を毎日頂いて生命の糧としているように、新聞、雑誌、書物は、現代人にとって日々欠くことのできぬ精神的食糧となつてゐるのでなからうか。文書、活字の時代といわれる現代に於て、文書伝道の必要なことはいふまでもない。しかし日刊、週刊、月刊の新聞雑誌が氾濫している今日では、なかなか読みきれぬ反面がある。そしてセツカチな現代人特に日本人は小説を読むにも長編物がきらいだといふ。しかし又、月刊雑誌一つ、ろくに読まない人でもハガキだけは誰でも読む。郵便物を見るは楽しいものである。予期しない人から思いがけない便りもあり、また待ちもっている郵便が来るからである。郵便配

達人は誰からも待たれ、よろこばれる。この郵便をとおして伝道が行われる。ハガキ伝道といわれるものがそれである。

そのハガキを受けた人は、誰でも興味をもつて読んでいられるであらう。費用も手数もわずかで、誰にでもできる伝道、しかも毎月つづけるならば、その人との間には親しみが出来、心の交流ができるようになり、生きた伝道がなされるのである。

○

私は昭和二十五年八月にハガキ通信を始め、満十七年余つづけて、今日に至つてゐる。その時その時に感じたことを五〇〇字までの文にまとめるのである、いろいろの事件

に遭遇して教えられたこと、念仏、読書等により特に感じたこと、時局と教との関連等、その時に実感したことを簡潔にまとめることにしている、特に書くこともないような場合には、仏陀の言葉、法然上人の法語等、或はハガキ通信に対し感想をよせられた文をまとめることもある。ハガキ通信を有缘の人々に差出すことによつて、教を自らに明かにし、またそのハガキを読んでくれる人からの感想、批判、指示を得たい、又それが自信教人信の旨に添いたいと願うてはじめてなのである。

初号はハガキ一〇枚をトリーシャ刷にして出したが、漸次増加して、一六二号から一〇〇〇枚、一七三号は一二四〇発送した。(そのうち二七〇枚は、名古屋通信の方が、会をつくつて発送してくれる、又二〇枚乃至四〇枚送るところが数ヶ所あり、自身が宛名を書いて出すのは毎号、六〇〇枚から七〇〇枚まで、またハガキ型の別紙に印刷して、講話の時など配布することもある)

毎月一回出したのであるが、伝道・旅行その他で、年平均十回出して来た。昭和四

十二年二月（一五四号、ハガキ七三五枚）までは自分でトーシャしてきたが、トーシャの方が、その文字の上にも、編輯の様式にも、少しは自身が現われるから、読む人との間にも親しみを覚える特色がある。しかし時にはきたなく、時には、不鮮明になったりするし、特に手間がかかる。そこで一五五号からは名古屋の新光印刷社長の好意により、印刷にきりかえた、ハガキ一ぱいに活字をつめるのでは読んでくれない。バラツと組んで読み易くするがゴツ、開始以来十七年余、一七三号までに、ハガキ発送合計約八九四〇〇枚となった。暇もつもって山となるとか、「継続は力なり」を実感する、ハガキ伝道の実績をあげるにはこの継続が大切であると思う。

六〇〇枚のハガキの宛名を、一日、二日のうちに書きあげて出すこともあるが、（伝道）旅行中、あちこち歩きながら、寸暇を見ては書く、それでも一週間位で殆んど発送できる。宛名だけでなしに、肉筆で短い法句なり金言なり、俳句なり、或は便りの一節を書き入れることにしている、わずかに五、六の文字を書き入れるにしても、六〇〇枚書くと、数千

字書くこととなって相当手数もかかるがそれによって、印刷だけのハガキに話が入り、ハガキ全体が生きてくるのであるから、一寸でも書き入れるようにしている。宛名を書くとき、その人のおもかげを偲び、なつかしみつつ、その人と語る思いで書くので、それは一つの楽しみでもある。それによってその人との心の交流もおのずから開かれてゆくのである。か。毎号発送毎に、十数通、時には数十通の感想や感謝の御便りが頂ける、そして教えられることが多い。この教をうけることが特に有難く、自他同利益を得、共生極楽を願うことができてゆく。

○

ハガキ通信を見て、悩みがカラッと晴れたとよろこばれる方もあり、頂いたハガキをポケットに入れ電車等の力でくりかえし読んでいるという方もあり、また悩みを訴えて相談の手紙をうけることもあり、時には直接来訪されることもあった。またこのハガキを中心に名古屋の同信が「共に楽しむ会」を組織し（会員二七〇名、会費年一五〇円）このハガキにその月の名古屋中心の仏教の集いの日時

場所を宛名の下に印刷して発送、年一回、会員総会（共に楽しむ会）を開いて下さる。又このハガキを複写して横信徒へ配布してくれる人も数人ある。又掲示伝道等にも各処で利用され寺報等にも利用されている。

ハガキ通信の費用は、奉仕する心ではじめてのであるが、ハガキを出している人にあえば、ハガキの御礼をいわれ、時にはハガキ代にとて思いがけぬ布施を頂くこともあり、送金下さる方もあり、収支相償うて余りあり、自身驚いている次第である。もし会費をとたずねられたら「共に楽しむ会」と同額を申上げることになっている。

ハガキ伝道は、その時その時の感想を書いて出す様式の他に、毎号、金言聖句を選んで出される人もあり、自ら絵を画き肉筆で文を書いて出す人（故中野善英師の如き）もある。或は毎月、寺の集りの案内を兼ねてのものもある。毎月檀家への便りは檀徒とのつながりも密となり、非常によろこばれる。案内状がそのまま伝道となるように工夫したいものである。それがそのままハガキ伝道の役割をするであろう。

和訳 經部

觀無量壽經 (五)

後世に念仏だけを遺す

村 瀬 秀 雄



このようにして釈尊は教えを説き終った。

釈尊の説法を聞いた韋提希夫人と五百人の侍女たちは、極樂浄土の広々とした莊嚴を見ることができたし、また阿彌陀仏の眞実身や觀音菩薩、大勢至菩薩を拝することができたので、この上なく大きな喜びの心にしたつたのである。この喜びはいまだかつてない法悦であると感じた。そして廓然として仏の慈悲を悟ることができて、諸法は無生無滅であるという智慧を悟った。五百人の侍女たちは、悟りを求める心をおこし、誰もが極樂浄土に往生したいと願うのであった。そこで釈尊は、すべてのものに対して、悉く皆往生することができ、極樂浄土に生れてからは諸仏を目のあたりに拝して必ず成仏することができるといふ証しを与えられた。

その時、阿難尊者は座から立ちあがって釈尊の前にすすみ、釈尊に申し上げた。

「釈尊よ、いまお説きになったお経にどんな名をつけたらよいのか。また教法の要旨をどのように理解したならばよいのであろうか」

釈尊は阿難尊者にいわれた。

「この經を『極樂国土と無量壽仏及び觀世音

菩薩大勢至菩薩を觀する經』と名づけ、また『惡業の障りを除き、諸仏の前に生ずる經』と名づけよ。

汝、阿難よ、まさにこの經を受持して、失念したり散佚したりすることがあってはならない。この觀仏三昧を修するものは、このままで阿彌陀仏と二脇士を見たてまつることできる。もし善男子善女人があつて、阿彌陀仏と二脇士の名を聞いたとすれば、ただそれだけで無量劫の長きにわたる生死の罪が除かれる。従つて阿彌陀仏を憶念するとすれば、その功德ははるかに勝つたものであることは当り前である。

更にまた、もし念仏するものがあれば、まさしく次のことを知るべきである。即ち念仏する人は、泥中に咲く白蓮華であるといえる位に尊い人である。そして觀世音菩薩と大勢至菩薩は、念仏する人のよき友達となる。いずれに未來には悟りの庭であり、諸仏の家である極樂浄土に往生することができるであらう」

1 念仏を相續する者は、大衆の中にあつて白蓮華の如く導く、觀音勢至兩菩薩がよ

き友となることを、法然上人はこれこそ現当二益（現在と未來に受ける二つの利益）といわれた。即ち

「念仏はこれ即ち勝行なり。故に分陀利（白蓮華）をひいて、もつてそのたとえとなす。たとえのころまきに知るべし。

しかのみならず、念仏の行者をば観音勢至役と形との如し、しばらくも捨離せず。余行はしからず。又念仏する者は、命を捨てて以後、決定して極樂世界に往生す。余行は不定なり。凡そ五種の嘉譽をつたえ、二尊の影護を蒙る。これはこれ現益なり。また淨土に往生し、乃至成仏す。これはこれ当益なり」（撰撰本願念仏集）

といわれている。

ここに二尊の影護（ものに影がつきまとう如く常に離れずにいて護る）とあるのは、善導大師が經典の勝友を解釈して「即ち観音勢至常に隨つて影護したもうこと、また親友知識の如し」（觀經疏）といわれた言葉の引用である。

また五種の嘉譽とあるのは、經典に「この人はこれ人中の分陀利華なり」とあるのを

善導大師が解釈して「もしよく相續して念仏する者は、この人甚だ希有なりとす。更に物の似てならぶべきなし。故に分陀利を引いて喩となすことを明す。分陀利というは、人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中の上上華と名づけ、また人中の妙好華と名づく。この華、あい伝えて葵華（蓮華）と名づくるこれなり。もし念仏する者は、即ちこれ人中の好人、人中の妙好人、人中的上上人、人中の希有人、人中の最勝人なりと、五種類の賞め言葉を用いていること指していったものである。

二尊の影護を蒙ることが、この世における念仏の利益であるが、また阿彌陀仏が凡夫を摂取して捨てないということも平生において受ける利益である。このことについて次のような法然上人のお詞がある。

「問ていはく。摂取の意をかうふる事は、平生か臨終か。いかむ。答ていはく。平生の時なり。そのゆへは、往生の心まことにてわが身をうたがう事なくて、來迎をまつ人は、これ三具足の念仏申す人なり。こ

の三心具足しぬれば、必らず極樂にうまるといふ事は觀經の説なり。かかる心ざしある人を、阿彌陀仏は八万四千の光明をはなちてらし給う也。平生の時てらしはじめて最後まで捨給はぬなり。かるがゆへに不捨の誓約と申す也」（念仏往生要義問答）

釈尊は阿難尊者にいわれた。

「汝、阿難よ、よくこの語を持つて忘れないようにせよ。この語を持つてということは、即ち阿彌陀仏の御名を持せよということなのである」

1 この句は、釈尊が經を説き終るに際して、特に阿難にいつけた言葉である。そして善導大師はこの句に対して「正しく弥陀の名号を付屬して退代に流通せしめたもうことを明す」（觀經疏）といわれ、釈尊が後世の人々のために、念仏だけを流通させるための句であると翻釋された。このことを法然上人は詳しく説明して

「念仏とは専ら阿彌陀仏の名を称するなり念仏の義常の如し。しかるに今正しく弥陀の名号を付屬して退代に流通することを明

かすというは、凡そこの経の中に、既に広く定散の諸行を説くと雖も、即ち定散をもつて阿難に付属して、後世に流通せしめず。ただ念仏の一行をもつて、即ち阿難に付属して、退代に流通せしむるなり」(選撰本願念仏集)

といわれた。それなら念仏だけを特に阿難に付属したのは何故であらうか。その理由について法然上人は、念仏だけが阿弥陀仏の本願であるからと説かれた。即ち

「既に仏の本願に望むるに、こころ衆生をして、一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるにありという。定数の諸行は本願にあらず。故にこれを付属せず。またその中において観仏三昧は殊勝の行なりと雖も、仏の本願にあらず。故に付属せず。念仏三昧はこれ仏の本願なり。故にもつて付属す」

(撰撰本願念仏集)

といわれた。しかしながら經典には念仏について説かれてゐる部分は甚だ少なく、他の諸行について説かれてゐる部分が多い。

それは何故であらうか。阿難に付属しない部門について詳しく説いてゐることに

て何か理由があるのであらうか。この点について法然上人は

「問うていわく。もししからは何が故ぞ直ちに本願念仏の行を説かずして、煩わしく非本願の定散の諸善を説くや。答えていわく。本願念仏の行は雙卷経の中に、くわしく既にこれを説く。故に重ねて説かざるのみ。また定散を説くことは、念仏の余善に超過することをあらわさんがためなり。もし定散なくんば、何ぞ念仏ひとり秀でたることをあらわさん。例せば法華の三説の上に秀でたるが如し。もし三説なくんば、何ぞ法華の第一なることをあらわさん。故に今、定散は魔のためにしかも説き、念仏三昧は立のためにしかも説く」(撰撰本願念仏集)と説かれてゐる。

しかし經典には多くの観相が説かれてゐるので、観相をしないよりもした方がよいのであるまいかということについて、法然上人は、それは無益のことであるとされた。即ち

「ある人問うていわく。色相観は観經の説也。たとえ称名の行人なりというとも、こ

れは観ずべく候か。いかん。上人答ての給はく、源空もはじめはさるいたずら事をしたりき。いまはしからず。但信の称名也と」(諸人勸化の御詞)

といわれた。そればかりでなく常には一層きついお詞を申されてゐた。即ち

「近來の行人、觀法をなす事なかれ。仏像を觀ずとも、蓮慶、康慶が造たる仏程だにも觀じあらはすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも桜樹桃李の花葉程も、觀じあらはさん事かたかるべし」(勸修御伝第二十一)

このように釈尊が説き終ると、目連尊者、阿難尊者、韋提希夫人その他のものは、釈尊の教えを聞いてみな大いに觀喜した。

王宮の論法を終えられた釈尊は、御足を虚空にあゆませて靈鷲山に還えられた。阿難尊者も同じく王宮から山に帰り、山に残つていた多くの人々のために、上に述べたような説法を復説した。これを聞いた多くの諸天善神たちは大いに歡喜して釈尊を礼拝し、座から退いた。

釈尊の説かれた觀無量壽經を終る

日蓮宗の題目と創価学会の題目

岡 本 薫

普通の日蓮宗の題目は五字の妙法蓮華経である。即ち「在世の本門と末法の始は一同に

純円なり、但し彼は脱此れは種なり、彼は一
品二年此れは但題目の五字なり」(日蓮上人
御遺文「観心本尊抄」とある。

日蓮上人が五字の題目を本尊としたのは、

日蓮宗の三部経の一つである観普賢菩薩行法
経に「この大乗經典(法華経のこと)は諸仏
の宝蔵なり、十方三世の諸仏の眼目なり、三
世の諸々の如来を出生する種なり」とあるか
らで、仏典にもとずいている。しかし題目の
裏には本仏釈迦があり、これが真本尊であ
る。これを人法一如の本尊と称している。

「妙法蓮華経は即ち釈迦牟尼仏なり」(守護
国家論)というのはそのためである。

しかし創価学会の題目は七字であって全く
異なるのである。即ち折伏教典の一〇四頁に曰
く「されば釈迦の仏法は法華経二十八品であ

り、日蓮大聖人の仏法は南無妙法蓮華経の七
文字の法華経であらせられる」

南無のついた七文字の法華経というものは
この世界のどこをさがしてもない。また日蓮
上人の題目は五字であるから、創価は嘘をつ
いているのである。日蓮上人の五字の題目は
開けば二十八品となる。しかし創価の七字の
題目は、すでに彼が法華経を否定しているの
で、開きようがなく、七字だけになってしま

う。しかし彼は南無妙法蓮華経ととなえて修
行しているから同じことではないかというか
もしれないが、南無のついた七字の法華経と
いうのであるから、行者が南無と帰命する

「南無」がないことになる。よって行者と本
尊とは結びつかないことになる。それはあた
かも阿弥陀仏、阿彌陀仏と唱えているのと同
じで、南無していないのである。しかも世界
中どこをさがしてもない七字の題目であるか

ら、功德のありようがなく、また仏教でもな
いのである。

彼が法華経を否定した文証は「……釈尊出
世の本懐である法華経でさえも、末法の今日
にはまったく力がなく、三大秘法の御本尊様
を受持するより他に幸せになる道はないので
ある」(折伏教典一三六頁)という文章である。

法華経を捨て釈迦仏を捨てると地獄におち
るとは日蓮上人の言葉である。即ち「今の日
本国は法華経にそむき釈迦仏を捨てた故に、
後生は必ず無間大城におちんことはさておき
ぬ、今生にも必ず大難に値うべし」(一谷入
道の女房に与えた手紙)と。即ち創価は地獄
ゆき。

浄土門の本尊阿弥陀仏と法華経に出てくる
本尊の釈迦仏とは同体異名であるから、念仏
者は決して釈迦仏を捨てていない。故に、地
獄へゆくことなく極楽往生できる。なんの心
配もいらない。安心して、ただ一向に念仏す
べしである。念仏ぐらい有難いものはない。
声には出さなくとも念仏である。善因果果の
理により人格が向上し、収入も得られるので
ある。



今月のことば

寒梅がちらほら咲くすがたに、寒さはやわらぎ、春のおとずれの真近かさを感じます。

「普へあまねく衆生のために、不請へふしようの友を作りて、大悲をもって衆生を安慰し、哀慰し、世の法門へほうほくとなる」

勝鬘夫人という気高い女性を主人公にして、その夫人が、大乘仏教のおしえを実践し、体験したことを説いている、勝鬘經という經典があります。その經典に説かれている一節を、味ってみたいとおもいます。

不請とは、文字通り、請い求められない、ということであって、不請の友とは、他人から請い求められるのを待っていないのではなく、他人のためは、みずから進んでつくす友という意味であります。



聖徳太子は、この勝鬘經に注釈をつけておられますが、この不請の友のことを、慈母が児のために、そそぐ愛情のような心をもった友のことである、というように述べておられます。

あまねく衆生を救うのには、みずから進んで、ちょうど、赤ん坊に母親が乳を飲ませるような気持ちで、衆生のためにつくすことが大切であり、このような大慈悲心から出るのではありませんということをこの經典はおしえています。

この勝鬘經は、さすがに夫人の言葉として説かれている經典でありますだけに、法母というように母性愛的なものが言葉にあふれていて、同じ衆生を救うといっても、深い愛情のあらわれを感じとることができます。

人びとのため、世間のためにつくすという場合、こういうふかい愛情を常にもつことが大切であろうと思われまふ。ただ、制度として、お役目として、あるいは世間的な義理

として、社会福祉の事業をおこなうというのではなく、また、予算を組んで機械的に金銭や物品を分配するというのではなく、法母といった愛情をもって、かかる事業がおこなわれたならば、救済をうけなくてはならない悲しい運命の人びとにとって、どんなに心の温まる思いとなることでしょうか。

観音さまは、三十三身の姿に現じて、いろいろの境遇の人びとに、積極的に慈悲を垂れられたといわれますが、今日のように、複雑な世の中になりますと、一層いくつもの身に現じて、しかも不請の友として活動する菩薩（ぼさつ）の大きな願いと実践がのぞまれるわけです。

もし我仏を得たらんに、国の中の人天、悉く真金色ならずんば、正覚を取らじ

浄土三部経の無量寿経に説かれている、法蔵比丘のたられた四十八の誓願の第三の願であります。法蔵比丘は、自分ひとりだけが仏となろうなどとは思わず、自分の国中の人天が全部、真金色になったら、はじめて自分も仏になろう、という誓願を立てているのです。

真金色というのは、金色に塗った仏像をおがまれた方が多いとおもいますが、およそ感覚的に目でみて、これ以上すぐ

れたものを色であらわすことのできない色を、金色で現しているとお考えくださって結構と存じます。金色という色だけにとらわれて考えますと、人間が、もし金色になったら奇態ですが、それは、ほんとうの美しさを表現するために、金色という色であらわしているのです。

国中の全部の人たちが、人間として最高の色を帯びないかぎり、法蔵比丘は、ひとりだけで覺りをひらこうとは、お考えにならないといっているのです。

いいかえますと、すべての人間が、人間として見られるものを、最高の理想的なものにまで高めないうかがりは、あくまで努力をつづけて止むことがないというのです。

近頃の世相においては、人間を金色にしようとするのではなく、人間を動物的本能のままにあらわすような風にさえ感じられます。

法蔵比丘の誓願は、わたしたちの身边に直接関係のない誓願のように考えられますが、実は、人間は誰れもが、この誓願をもっていなければならないと思います。

どんな人も例外なく、見るからに美しい金色の身をそなえるようになったら、すばらしい世の中になることでしょう。

お念仏はあみださまのみ光に照らされて人間のもっている美しさ、尊さを金色にあらわしてください。

信仰・教養の手引

松 濤 弘 廉 著

現代人の指標

190頁 B6版
定価500円 千50円

松 濤 弘 廉 著

仏教徒必携

142頁 新書版
定価300円 千50円

海外生活11年の著者が世界的視野に立って現代人のために、仏教信仰のあり方と浄土宗信仰による人生観の確立を強調。とくに後者はひろく担信徒のための手引書として始適。 10p以上1割引。

図書館協会すいせん図書

創 価 学 会

——その性格と活動——

竹 中 信 常 著

本書は著者が手がけてきた創価学会研究の総まとめで、しかも、現下もつとも問題とされている政界、実業界、労働組合と学会とのふれ合いについて平易に叙述したユニークな著作、本年六月参院選をひかえ、創価学会の性格を知り、その活動方針を見究めるための必読の入門書として図書館協会のすいせんをうけた。

労働法学出版社刊

定価 400 送料70円

以上本会にて取扱います。

「浄土」講読規定	一部 定価 金六十円 (送料 六円)	会費一カ年 金七二〇円 (送料 不要)	浄土 二月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十三年一月二十五日 印刷 昭和四十三年二月一日 発行	定価 六十円	編集人 宮林昭彦	発行人 佐藤密雄	印刷人 関 二三男	印刷所 新光社印刷株式 会社	東京都千代田区板橋一ノ十二ノ六 発行所 法然上人顕仰会 電話東京二六二局五九四番 振替東京八二一七七番
----------	-----------------------	------------------------	--------	--	--------	----------	----------	-----------	-------------------	--



迫力にとんだ来迎図

阿彌陀聖衆来迎図

高野山有志八幡講十八箇院所蔵

大きな鐘聲が高野山の静寂を打ち破る。朝の光が木々の朝露に乱射し、急に明るさを倍加する。靄をついて参詣に向う信者の足音も心よい。観光客のない高野山の夜明は、山全体が宗教的雰囲気につつまれて、何とも心地よい。大伽藍の前に宝物館がある。ここにある阿彌陀聖衆来迎図は十二世紀前半の作、浄土教芸術に占める意義は大きい。

中央正面に大きく阿彌陀如来を描き、その前面に観音、勢至の二脇侍、その背後の雲上には樂器を奏する天人を左右に配し、雲脚は遠く天の彼方に消えうせる。

この画の特色とするところは、斜線的に天の一角から来往する阿彌陀聖衆を、第三者的な観点から観察するというのではなく、眼前に忽然と大きく阿彌陀如来が出現し、その映現を急ぎ追うようにして観音、勢至が前面に廻りこむという中尊阿彌陀如来を主体にした構図の配置で、観音と真正面に対置するという迫真性が現われている。ここには距離をおいて聖衆の来迎を見ろという冷静さはなく観者に真正面から迫ってくる動きにとんでいゝる。その根源は叡山源信の提唱した観想念仏の所産である。作者の宗教的な美的体験が、画期的なこの名画を残したといえる。

最近刊 浄土宗徒待望の好著

佐藤 密雄 著

仏教々団の成立と展開

著者のもつとも得意とする仏教々団の規律と統制の問題を分りやすく概説し、現在の仏教々団の在り方に多大の示唆を与える。

林 靈法 著

仏との出会い

現在仏教界における革新的思想の第一人者たる著者が若き日の苦難と思想遍歴を通じて到達し得た浄土教信仰を余すなく描き尽す。

竹 中 信 常 著

日本人と仏教

法然上人と念仏信仰とをひろい視野のもとに、現代日本人の思想構造のうえに位置づけた好著

以上いずれも

教育新潮社刊

定価 六〇〇円
送料 七〇円

◎ 当方にてお取次ぎいたします

大 正 大 学

東京都豊島区西巣鴨4の530 電話(918)7311

昭和43年度学生募集

募集人員 200名・2,3年若干名 大学院修40名・博13名
カンセリング研究生(10名)

出願期日 第一次 1月10日～2月26日

第二次 3月2日～3月27日

試験日 第一次 2月27・28日 第二次 3月28・29日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学
文学部 文学科—国文学・米英文学
史学科—日本史学
哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学
社会学科—社会学・社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリング 研究生

男女寄宿舎あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ(〒150円封入)